

2021.9

秋冬

No.113

思文閣出版

鴨東通信



Pond of Hikone.

池 / 根 産

❖ 日常語のなかの歴史 26
せいばい【成敗】

◆ 木下竜馬

❖ ていーたいむ

『校訂 原本 古画備考』が生まれる
まで

— 継承される江戸の学知 —

❖ 特別寄稿
◆ 北野良枝 ◆ 玉蟲敏子 ◆ 鶴岡明美

『校訂 原本 古画備考』の発刊を祝う

◆ 辻惟雄

源信という多層性と源隆国

◆ 荒木浩

刺繍に魅せられて

— 調査小咄と京都の魔力 —

◆ 松原史

中世後期の守護をめぐる共同研究を
終えて

◆ 川岡勉

「硫黄大名」と「銀大名」

◆ 鹿毛敏夫

❖ 史料探訪 74

若狭町熊川区の山車の見送り幕

◆ 川波久志

日常語のなかで、
歴史的語源や
エピソードを取り上げ、
研究者が専門的視野から
ご紹介します。

せいばい 成敗

時代劇での「成敗！」という決めゼリフや「喧嘩両成敗」などのように、現在では処罰、なかでも死刑の意味でなじみの深い語である。だが、「成敗」はれっきとした漢籍由来の語である。「成」と「敗」という対義的な二文字を組み合わせた語であり、元来は①「事なることとやぶれること」の意であった。古代日本では漢籍の用法そのままだったが、「成敗を決する」という表現から転じて、平安後期から訴訟・政務の文脈

で②「事の処置・判決・処理」という意味が派生した。

鎌倉時代には②の語義が定着し日常語化する一方、①の語義はほとんど姿を消してしまった（以上の語史は、桑竹民「成敗」小考（『鎌倉時代語研究』一六、一九九三年）による）。処置・裁断の意から、さらに処罰・こらしめの意味に限定されていくのは中世後期のことである。

かかる「成敗」の語義転換と普及に、鎌倉幕府の「御成敗式目」が大きな役割を果たしているのは間違いない。注目したいのが、御成敗式目の古注釈であ

る。式目古注は、訓注を旨とした荒唐無稽な解釈を繰り出しわれらを悩ませる一方、法や政治についての中世人の思惟を窺わせる貴重な史料でもある。

一三世紀後半の六波羅奉行入斎藤唯浄による式目古注のひとつ「関東御式目」では、「成敗」の語をこう説明する。まず「成」は平、畢、就、善に、「敗」は破、廢、乱に通じると、二字が対義語的な意味をもつことを確認したのち、「政の理乱、世の盛衰、人の憂喜、弁えて裁許するを成敗とす」と結論する。つまり、正か負かを見極めて判断することが成敗の本義だとするのである。唯浄の意図を忖度するに、日常語としての「成敗」の語義は②なのに、字義に即せば対義語的な①の語義しか読み取れない。その懸隔を埋めるため、上記のような論理展開を構築したのではないだろうか。唯浄が上述のような語史に明るかったとはとても思えないのだが、びたりと言い当てている。訓注という一つの方法に徹しながら正確な語釈を導いた我が唯浄のお手並、見事と言いたい。

てーたいむ

『校訂 原本 古画備考』が 生まれるまで ―継承される江戸の学知

北野良枝

(元東京藝術大学助教)

玉蟲敏子

(武蔵野美術大学教授)

鶴岡明美

(昭和女子大学准教授)

古画備考プロジェクトが始まるまで

―まずは、本研究の発端や研究主体である古画備考研究会の成立、本書刊行へと至った経緯について、お聞かせください。

玉蟲…ちょうど一九九〇年代の終わり頃、私は「琳派とは何か」という研究テーマに取り組んでおりました。美術史研究では江戸幕府お抱えの奥絵師で狩野家出身の、朝岡興禎(一八〇〇〜五六)による『古画備考』が重要であるということは、重々知られておりました。一般に普及する明治期の『増訂 古画備考』(一九〇三年初版、弘文館/一九七〇年復刻。以下「活字本」)のほかに「原本」があるけれども、原本と活字本の違いを考察した研究は皆無でした。当時、原本を所蔵する東京藝術大学附属図書館では貴重書扱いで管理され、手続きをすれば見られるという環境でしたので、まず原本を

閲覧しなければいけないと思いました。琳派研究に関わる「光悦流」(巻三十五)を中心に原本を見ていくと、活字本と原本の「光悦流」では全く異なっていることがわかりました。

『古画備考』は古代から近世の画人まで、記述される範囲が広いので、この本文の比較研究を全巻にわたってやると、どんな日本美術史の像――江戸時代の学知――が浮かび上がってくるのだろうかという衝撃的な印象を受けたことが研究の発端です。原本で特徴的なことは、小さな紙をいくつも貼ったスクラップ状態であることです。狩野派が鑑定に持ち込まれた古画の写しを集めた「探幽縮図」(縮小サイズの図画)がありますが、原本は、いわば狩野派内における「探幽縮図」の発展した形態だったのだと思います。



玉蟲氏

——個人研究から大プロジェクト

へと発展するきっかけとは？

玉蟲…二〇〇一年に私が大学に移った時、『古画備考』原本の研究が科学研究費の助成対象になるということがまず頭に浮かびました。もう一つのきっかけは、私は長く

静嘉堂文庫美術館に勤めましたが、そこは戦前・戦後を通して『大漢和辞典』（通称・諸橋大漢和）編纂の拠点であったので、そこからも刺激を受けていたのかもしれませんが。辞典の引用書である漢籍が三菱財閥の岩崎彌之助・小彌太が収集した静嘉堂文庫にあり、諸橋轍次先生（一八三〇―一九八二）やその弟子の米山寅太郎先生（一九一四―二〇〇七）を中心とするグループで、それを書庫から出して調べながら『大漢和辞典』が作られていったわけです。後述する『古画備考』出版の問題点とも関わりますが、これは国の機関ではなく戦前の財閥の支援と民間の出版社によって遂行された大事業です。こうした事業はかなりの学識を持たないとできないにもかかわらず、辞典を作った人たちは、近代的な概念での研究者として評価されているのだろうか？ という疑問もありました。でも誰でもまず参照する基本図書というものは、誰かが作らなければ何も始まりません。大学では、そのような一大プロジェクトにじっくり取り組めるのではないかと考えました。

この共同研究の主旨を、まずは私と同世代の先生方——ずっと私たちと一緒に研究に取り組んでくださった相澤正彦さん（成城大

学、並木誠士さん（京都工芸繊維大学）に、最初に持ちかけて、快諾されました。それから野口剛さん（根津美術館）や五十嵐公一さん（大阪芸術大学）ら周囲の若い世代や、比較的研究チームも近い方たちに応じてお声がけをしたら、すぐ乗り気になってくださって。いろんな世代が関わりながらある大プロジェクトに取り組むことは、私の大好きな『三銃士』とか『七人の侍』に描かれた、世代を超えたグループ構成というものに、影響を受けていたかもしれないですね。

まずは、活字本の本文データを入力するところから始めました。さらに、原本の画像を撮影し、東京国立博物館にある「図書寮印」という印が押された写本（後述。以下、「図書寮印本」）のマイクロフィルム申請などを進めていきました。活字本のデータ入力、大学院生さんたちにお声がけをして、たとえば早稲田大学ではその頃助手をしていた江村知子さん（東京文化財研究所）を中心をお願いをし、成城大学では相澤研究室の高橋真作さん（東京国立博物館）、それから東北大学では畑靖紀さん（九州国立博物館）に、院生たちをまとめてもらいました。井田太郎さん（近畿大学）が、「こうした研究は現在ありえない、〈絶滅危惧種〉といわれるほどに大学環境も激変してきますが、たとえば宗像晋作さん（大分県立美術館）の、『大変だったけれども基礎的研究につながる仕事をしているということが自身の研究者のあり方にとってすごく大事なので一所懸命やってきた』という発言や、『学生時代を懐かしく思い出しながら校正をしました』という山口真理子さん（城西国際大学水田美術館）のコメントを伺うと、このプロジェクトが若いみなさんにとって

かけがえのない〈ザ・基礎研究〉というべきもの、アカデミックな価値のある事業、灯し火みたいなものになっていったのかと感じます。

■古画備考研究会の発足から『校訂 原本 古画備考』の出版へ

玉蟲…研究会の発足は二〇〇三年からになります。二〇一三年にはこの研究会編で『原本 古画備考』のネットワーク』を科研費の成果論集として出版しました。力作の論文が多く、このたび再評価してもらえればと思います。この論集を出して、ある程度校訂作業が進んだところで科研研究は一区切りとなり、その次の課題が、いよいよ本書、校訂編を出版することでした。しかし、科研費では、伝統的な日本語表記から現代的な日本語表記に変える事業における校閲（原稿の誤りや不備な点を調べ、正すこと）は対象外でした。そこでその当時、出光美術館理事であった黒田泰三さん（明治神宮ミュージアム）が、出光文化福祉財団（現出光美術館）による出版助成への橋渡しをしてくださり、さらに出版社への橋渡しは並木さんにご協力いただくことになり、『大漢和辞典』同様、『校訂

原本 古画備考』の出版は民間出資の大事業となりました。

当時東京藝術大学の助手をなさっていた北野良枝さんに、翻刻部の校閲をお願いすることになりました。彼女の本文の翻刻校閲だけでも大変な分量でしたが、さらに、図書

寮印本と活字本との校異（本文の異同を比較して正しくする作業）をまとめる必要があるので、武蔵野美術大学で非常勤講師をされていた鶴岡明美さん（昭和女子大学）に、脚註部に関してお世話になりました。

■「原本 古画備考」Ⅱ江戸の学知を翻刻する

——明治期の活字本（復刻版）が普及していますが、ずばり、現代に江戸期原本を翻刻することの意義とは？

北野…翻刻の意義として何よりも重要なのは、本書が、朝岡自筆の原本を初めて翻刻したという点だと思います。

私がこのプロジェクトに加えていただいたのは、二〇一一年の末頃だったかなと思います。ただそれより一〇年ほど前の二〇〇一年に東京国立文化財研究所から刊行された科研の報告書の中で、玉蟲先生が、東京藝術大学附属図書館に所蔵されている原本と、美術史研究者が日頃利用している活字本の間に、大きな違いがあるということ指摘され、このことにたいへん興味を持っていましたので、お声をかけていただいたときは、とても嬉しかったのを覚えております。ただ、実際にやってみるとなかなか大変なことが多かったようにも記憶しております。

原本と活字本の違い

北野…現在広く普及している活字本の底本（翻刻の下地となっている本）は、東京藝術大学附属図書館所蔵の原本ではなく、東京国立博物館に所蔵される図書寮印本という近代の写本です。この図書寮印本を底本にした活字本と、原本との距離は、かなり大きいようです。その理由のひとつとして、明治期の活字本が、かなり増補さ



北野氏



鶴岡氏

れている（底本にはない内容を増やしたり、補ったりしている）ことがあげられます。ある特定の項目に注目して、両者を比較してみると、その違いが小さくないということがよくわかる場合があります。各巻末の補註にも示したとおり、活字本では相当な量の参考図が追加されています。

それから、活字本が、いわゆる旧字体であらわされているのに対して、今回の翻刻では、常用漢字などの通行の字体を使用している、という点も重要かと思います。活字本は明治期の刊本なので、当然、字体として他の選択肢はなかったわけですが、現代の私たちにあって、旧字体は馴染みのないもので、特に若い方などは、活字本を開けたはいけれども、そのまま閉じてしまいたくなるといったこともあったのではないかと思います。今回、通行の字体を採用したことによって、より幅広い層に利用していただけるのではないかと、期待しております。

原本の特徴

北野…原本の特徴としては、まず、玉蟲先生もおっしゃっていたように、数多くの紙片が貼られているという点があります。朝岡は基本的には、『古画備考』を書斎で書き進めていったのだと思いますが、時に、他所で見ることできた作品の図や落款をその場で写して、その紙片をそのまま原本に貼り込むということをしています。また朝岡の協力者からもたらされたと思われる紙片が、

貼られていることもあります。こういった紙片は、時に複数枚が重ねて貼られていて、そういった場合は、下に貼られている貼紙が、先に貼られたと考えられるので、『古画備考』の編纂に当たって、朝岡が、情報をどんどん付け加えていく様子が想像できるわけです。本書では、この複雑に貼り込まれた紙片を、貼りこまれた順序や内容によって適切と判断される位置に配置しました。

それから、原本の図の傍らなどに、小さな文字で、朝岡が記した註記が数多くあるのですが、活字本ではこれらがかなり削除されています。本書では、こういった註記を丁寧に翻刻していったので、情報量として、活字本よりもさらに豊かなものになっているかと思いますが、さらに、活字本の時代では難しかったことですが、本書では、原本の必要箇所をデジタル画像として取り込み、掲載したため、原本にある朝岡の縮図や落款の写しなどが、そのままの形で再現できています。またそれ以外にも、文字だけでは説明しづらいものや理解しづらいものについて、補註部に当該箇所のデジタル画像を貼り込んで補足することもできました。

鶴岡…私は、原本と、図書寮印本、活字本の三者を校合して、それらがどのように違っているかという校異をとる作業から、お手伝いという形で入らせていただいております。料理で言うところの下拵え的なところはできておりましたので、私がすぐく迷って困ったということは、実際のところそれほどありませんでした。ただ、これだけの大部な著作ですので、このお話をいただいて最初の数年間は、全体の凡例の下地ともなる、校異マニュアルづくりに携わらせていただきました。その間にも実際に、練習のような形で脚

註(本文の下に付す、校異を示した註をつけてみて、この方針で適當かどうかということを試行錯誤したり、校訂を担当してくださった方からも、「ここはどのようにやりますか」というような、たくさんのお問い合わせをいただきました。それが非常に生産的な形で作用して、マニュアルづくりの作業が半年ぐらい進んだところで、とりあえずのルールとして決まったものに従い、以後は微調整をしながら作業を進めていきました。

● 原本の翻刻を通して見える朝岡の姿

鶴岡●朝岡自筆の原本から伝わってくる雰囲気は、その書き振りが、すごく優しいというか、心が落ち着いていた、情緒の安定した方だったのだなと思わせられます(笑)。今回、通行の字体で校訂をおこなうということは、旧字体の多い活字本と比較して、朝岡が書いたままの表記に、より即した翻刻に戻すということでもあるかなと思います。朝岡が試行錯誤した跡が、活字本だと、全巻を通してフラットな漢文体の翻刻に埋もれて見えにくくなってしまっている。私の記憶している中で、たとえば武家の巻などには貼紙が多く、朝岡の試行錯誤した形跡のある箇所がありました。こうした朝岡の姿も読者の方にお伝えできるような本になっているのではないか、と思っております。

—— 本巻と合わせて、より原本に即した内容の索引も刊行されます。

玉蟲●辻惟雄先生と中島純司先生が一九六六年に作られた冊子が、このたびの索引作りの原点です。活字本刊行時、合わせて索引も刊行されていますが、これは漢字の部首引きです。でも実際私たちは、日本語として発音して画家の名前などを探すわけなので、

たとえば宗達なら「そうたつ」で引けないと不便ですよ。ただ読み方をどうするかというのは、最大の難関です。索引を作成することは、日本における漢字受容のあり方まで含んだ大きな問題と向き合うことにもなります。索引は、辻・中島両先生の方針を引き継ぎ、通例的な読み方による、項目の五〇音順としました。

■ 受け継がれる古画備考のネットワーク

—— 本書は、現代における古画備考を通じたネットワーク構築と、その広がりの可能性を秘めているといえます。

玉蟲●朝岡の周辺には、檜山坦斎(一七四一―一八四二)のように、上の身分と中間層とをうまく結ぶ重要な役割をした町人学者がいました。実際、江戸後期の古画研究では、下谷で下級武士たちが中心となる研究会活動が見られます。朝岡も狩野派の絵師でありながら、家の近所には国学者の塙保己一(一七四六―一八二二)、『群書類従』などを編纂)の和学講談所があつて、原本にこれこれの情報は「塙氏にきいた」といったコメントが出てくる箇所もあるほどです。まず、こうした居住地域を等しくする人たちの地縁ネットワークで研究が盛り上がり、さらに地縁集団と地縁集団がつながって情報を集めていく。『古画備考』はこうした状況のもとで生まれました。

その後、明治時代に入り、東京美術学校、それから帝室博物館などの近代的美術制度の確立を背景に、もともと公刊を意図されていなかった『古画備考』原本が次第に重視されるようになり、お雇い外国人のアーネスト・F・フェノロサ(一八五三―一九〇八)ら

と狩野派画家との接触や、岡倉天心（おくらてんしん一八六三〜一九一三）の介在を

経て、「朝岡の偉業を広く世に知らしめたい」という明治期の公益尊重の考え方のもと、帝室博物館の館員、太田謹（おたえい）の増補訂正により活字本が刊行されました。これらはやはり、近代美術行政というものを垣間見せるネットワークだったといえます。

それを受けて始めて今回始められた私たちのプロジェクトは、国の科学研究費を受けた研究から始まって、校訂・出版事業は民間財団にお世話にならないと達成できなかったという、二重性があります。これは現在の日本の学術界のあり方をあぶり出していると思います。私たちの世代は、ネットワークを作って研究してきましたが、これからの世代では、なかなか共同研究が広がりにくいのではと感じています。

北野…この共同研究の特徴としては、世代の幅が非常に広いということにあるのではないかと思います。さまざまな世代が関わることによって、お互いの世代が刺激を与えあいながら、全体として成長していくことができた、というのが、大きな成果の一つだったのではないかと思います。また、昨年から新型コロナウイルスの影響が諸方面に及んで、困ったことばかりですが、本書の刊行においては、昨年からオンライン形式で編集会議を何回か開催することができ、最後の詰め段階で、予想以上にスピーディに成果をあげることができたと感じています。本研究に限らず、オンラインという形式を採用することによって、共同研究というものの幅が、さらに広がっていくのではないかと、そういう可能性を実感いたしました。

鶴岡…そうですね、そういう共同研究というのは、いろんな方の知恵をお借りして、何か一つのことができるという非常に素晴らしい機会ではないかと思って。若い世代が何かについて知りたいたいというときに、情報は割と簡単に手に入れられるようになってきていますが、一方でその情報があまりにも多くて、果たしてこの情報の正体は何だろう、あるいはなぜこの作家がこんなに評価されているのだろう、というところから古画研究に入っていくような人も現れているようです。共感して面白いなと思ってくださる若い方が多いという感触を得ていますので、そうした若い方を、「面白いですよ」と巻き込むそのきっかけに、この『古画備考』がなければいいんじゃないかな、と強く念じております。

玉蟲…原本と、図書寮印本と、活字本を校合するところからもともとの研究は始まって、原本の翻刻の精度を高めて、脚註部ではそれらの異同をまとめ、さらに補註をもうけてそこに補足情報を回す。その結果、補註からは図書寮印本や活字本がやってきた増補のあり方が明解になり、原本には江戸の学知、増補部分には明治の近代知という、それぞれの領分がはっきりしてきました。これは、いわゆる近代に導入された西洋的な考え方と、近世以来の学知がどのように織り成されてきたのかという、美術史を超えたダイナミックな研究関心にも繋がっていくと思うのです。『校訂原本 古画備考』を、多くの人たちに役にたつ知的生産物として、広く受け止められていただくことを望みます。

特別寄稿

『校訂 原本 古画備考』の発刊を祝う

辻惟雄（つじのぶお）
（國華）元主幹

「コガビコウって何の本？」今どきの学生諸君は、こう言って首を傾げるかもしれない。だが六〇年前、私が東京大学の美術史学科にいたころ、こんな質問をしたらドヤされただろう。

当時この本は、日本絵画史を学ぶものにとつての虎の巻だった。私が学恩を受けた福井利吉郎先生は、調査旅行の折や、コレクター・古美術商を訪ねるとき、必ずこの本を携帯しておられたという私が三〇歳で東京国立文化財研究所に入ることができた時、所長であられた田中一松先生は、「昭和の古画備考」と呼ばれる膨大なメモで知られる。氏の薫陶を受けた私も『古画備考』を座右の書にした。ただ、使うとき不便を感じたのは、索引が引きやすい読み方による五十音別ではなかったことだった。そこで一計を案じ、中島純司氏（現佛教大学名誉教授）とともにガリ版摺りの『古画備考五十音別索引』三〇〇部をこさえ、実費三〇〇〇円で頒布した。



辻氏

その後、四〇歳から六〇歳まで、大学で日本美術史を講じながらも、『古画備考』の重要さを説くことを怠っていた。都心や関西で未知の作品に接する機会を失った私に、この本を開く機会が滅多に少なくなっていくためと思われる。

当時、古美術に関連する学者、

コレクターの『古画備考』に寄せる関心は、一部を除いて、次第に薄れていった。しかし、私に続く世代の研究者は、意外にもそうでなかったのだ。

『原本『古画備考』のネットワーク』が、武蔵野美術大学教授の玉蟲敏子さんから思いがけなく送られてきたのは、私が八〇歳になった二〇一三年の事である。改めてこの本を書棚の奥から取り出し、載せられた一六人の研究者による二〇本もの力作論考に目を通して充実ぶりに驚き、基礎をないがしろにしない後進の成長ぶりを頼もしく感じた。私の東北大時代の教え子に当る玉蟲敏子さんが、同世代、先輩の研究者を誘い、「古画備考研究会」を立ち上げ、学生諸君も加わって、二〇年間、調査や発表会を続けた、その成果である。研究会の作業はさらに粘り強く続けられ、一九〇三年に弘文館から初版の出た流布本でなく、一八五〇年代に起筆された原本の内容をできる限り原本に即して校訂・刊行するという難事業を遂に果たした。忘れられていた『古画備考』が、もとのままの初々しい姿で蘇る。まさに快挙だ！

木挽町狩野の家に育った朝岡興禎の味わい深い模写を、最新の印刷技術でそのまま写し取り、原本の息遣いまで再生をはかった今回の出版は、完成までに思いがけない時間とコストを要し、五巻の豪華本となった。だが「増訂」とうたった弘文館の流布本の縮図と、原本の縮図を比べると、違いは一目瞭然である。心から「おめでとう」と申し上げたい。この五冊本に、五十音別の索引がつけられたことも、うれしい出版社の配慮である。

二〇二一年七月

源信という多層性と源隆国

あらきひろし
荒木浩

恵心僧都源信は、寛仁元年（一〇一七）六月十日の入滅で（『楞嚴院二十五三昧会結縁過去帳』、二〇一八年には「二〇〇〇年忌特別展」の「源信 地獄・極楽への扉」が奈良国立博物館で開催された。最近、重厚な図録を手にとって再読しながら、源信という人と私の専門分野との関わりの深さを改めて考えた。

『方丈記』では長明が、方丈の庵の黒い皮籠三つに、和歌・管絃と源信『往生要集』の抜き書きなどを入れていたとある。日野の閑居に折り琴・継ぎ琵琶を持ち込み、漢詩文や和歌を詠ずる長明ならではのユニークな文箱だが、仏教に音楽は欠かせないし、源信には、狂言綺語の和歌と悟りをめぐる説話もある。源信の多彩な受容史をうかがう一コマとも言えよう。

受容史といえば『今昔物語集』で著聞する母の説話は、史実と伝説のはざまで多様な文献に載り、『源氏物語』宇治十帖で浮舟の運命を左右する「横川の僧都」の准拠ともなる。きわめて早い享受例だ。当時源信は、現役の学僧であった。

『源氏』手習巻で、長谷詣の帰途に危篤となった母を見舞いに僧都は山を下り、宇治の院に運び込む。すると、瀕死の様子で泣

くばかりだった浮舟を発見して救済。浮舟は妹尼に預けられ、洛北の小野に隠遁する。『源氏物語』の古系図の中には、この妹を「安養尼」として掲出するものがある。安養尼は実在の源信の妹だ。現実が物語説解に投影してしまったわけだが、事情は少し複雑である。

源信には四人の姉妹がおり、そのうち三人は出家した（前掲『過去帳』。姉の願西（『法華験記』）と妹の安養尼願証（『左経記』）が著名だ。ところがこの姉妹は早くから混同される。『今昔物語集』は、『法華験記』の願西説話を妹の安養尼の説話と接合して一話にまとめしまった。『続本朝往生伝』の慶政本系古写本は、安養尼の名を「願西」と語る。『古事談』には、源信が、終焉の時は必ず来会すると妹安養尼と交わした契約を守り、千日行の最中に西坂本へ下山。絶命した妹を蘇生させ、彼女は六年後に往生したという説話が載る。しかし安養尼は長元七年（一〇三四）の入滅で（『左経記』同年九月十日冬、源信より長生きだ。ここにも姉あるいは母の伝承が混線している（拙著『かくして「源氏物語」が誕生する』参照）。

『源氏』の僧都は世俗性も強く、聖俗両面を兼ね備えたトリック

スターとして、物語世界をかき回す。浮舟は、妹尼が長谷へお礼参りの不在時に、僧都に懇願して出家する。妹尼は「罪も得ぬべきことを」私に相談もなくなぜ?と「僧都を恨みそし」る。また「ものよく言ふ僧都にて」、浮舟生存の秘密を明石中宮(光源氏の娘)に漏らし、中宮は、その情報をも、葬儀も済み死んだものと諦めていた薫の耳へも入れてしまう。僧都は物語の最後で、横川を訪ねた薫に迫られ、自らの怨卒を悔いて浮舟に還俗を勧める手紙を託す。浮舟はこれを拒絶、薫は当惑のまま取り残され、『源氏物語』はオープンエンディングという画期的な終わりを迎えた(拙稿「私の物語と同時代性」『アステイオン』九〇号参照)。

ところで浮舟は、出家の翌朝、孤独な思いのやり場を手習筆写の営為に求め、「ただ硯に向ひて、思ひあまるをりは、手習をのみたけきことにて書きつけたまふ」。古歌などを書き連ねるのが日常の、手習の君となった。この「硯に向ひて」が『徒然草』序段の典拠である(拙著『徒然草への途』)。横川と兼好についても考察すべき点が残る(拙稿「徒然草」の時間・序説『仏教文学』四六号など)。

近刊の拙著『今昔物語集』の成立と対外観(思文閣出版)でも源信の実像と『往生要集』に挑んだ。永延元年(九八七)、源信は山を降りて遠路博多に向かい、十月二十六日に北宋の商人朱仁聡と面会。翌年正月十五日、朱仁聡と同船の斉隠に『往生要集』を託して遣宋した。慶滋保胤『日本往生極楽記』他を添えて、齋然の成功を承けてのことだが、源信自身は本朝に留まり、著作のみ海を渡る。この刺激的な営みは、宇治平等院の南泉房で編纂された源隆国『安養集』遣宋の先蹤となった。隆国は公卿として畿内

を動かず、入宋する甥の成尋に託すという対照である。しかし隆国は、なぜか源信への意識を語らない。代わりに隆国は同じ場所「宇治大納言物語」を編纂して文学史に革命を起こし、そしてそれは「今昔」や「宇治拾遺物語」の母体となって散佚した。

源信が遣宋した『日本往生極楽記』には、夢のお告げで聖徳太子伝と行基伝の二話が巻頭に加えられ、劇的な改稿がなされている。そこでは聖徳太子(観音、南岳慧思の後身)と飢え人(達磨の後身、また行基(文殊)と婆羅門僧正(釈迦の前で行基と一緒に学び、南天竺から来日)という、天竺・震旦・本朝の三国世界観を体現した聖人が、あえて日本で、インドの陀羅尼のような和歌を贈答する。漢字で書かれた読めない和語を、宋の賢人へとぶつける野蠻。かたや隆国は、文字ですらない口伝えの伝承を、やはり天竺・大唐・本朝に求めて和語・仮名文で記し、世界で唯一、我が子羅睺羅を恋慕う釈迦の最後のコトバを描き出す。

源信は、博多で宋人と接しながら「然猶方語未通」と異言語不通のもどかしさを嘆きつつ別れを惜しみ、「同亦贈欲令知異域之有此志」。嗟乎一生再々。兩岸蒼々。後会如何。泣血而已」と『往生要集』遣宋の手紙を閉じた。私は、こうした源信や保胤の営みを「海を渡る自照性」、「投金される和国性」などと評してみたが、当否やいかん。この新著で批正を仰ぐ。

(国際日本文化研究センター教授)

刺繍に魅せられて——調査小咄と京都の魔力——

まつばら ふみ
松原史

今春、およそ十年以上にわたる大学での研究の成果を一冊にまとめて上梓することができた。ひよんなことから刺繍に出会い、「明治の刺繍はこんなにすごいのに、なぜ評価されていないのだろう？」という純粋な疑問を持ったことが、まさかこんなにも手間暇かかる学問の「種」となるとは正直思ってもみなかった。ただ刺繍を追いかけていただけなのに、数年にわたりヨーロッパからトルコまで様々な国を渡り歩くこととなり、趣味だった一人旅と美術館巡りは純粋な趣味ではなくなってしまうが、それと引き換えにしてもあまりある充実した研究生活となった。

刺繍の研究は、最初から最後まで手探りだった。先行研究はほとんどなく、「工芸は作品論ではなく作品群で考えなければならぬ」という臆げな知識から、とにかく作例を見つけようと奮闘する日々となった。

一つの手がかりから芋づる式に所在を聞き回り、コンタクトを取り、宝探しのよう刺繍作品を見つかったり、京都で今も活躍する刺繍職人からお話を伺ったりしていった。作品の分布も、予想とは違っていた。

近代の日本側の資料を見ているとイギリス、フランス、アメリカの趣味嗜好を分析していた様子が見てとれ、東欧を直接的な市場としていた感じは受けなかったのだが、実際現地を訪ねてみると、国ではなく個人のコレクターによって買い集められた日本刺繍の豊かなコレクションに出会うことができた。これほどまでに全ヨーロッパに日本の刺繍があったことは私にとって予想外であったし、その刺繍を見せてくれと日本人が訪れることも、いずれの国のホストにとっても予想外であったようだ。でも皆さん、本当によくしてくださった。

イギリスやドイツでは美術館の整った設備、充実したオフィスや収蔵庫に圧倒され、アーカイブの充実、一般への公開の仕方、アクセスのしやすさに感銘を受けた。また働いているキュレーター（学芸員）も皆おしゃれで陽気。とても楽しそうに仕事をしている姿が印象に残った。

東欧では、歴史を感じさせる出来事がいくつもあり今も心に残っている。ハンガリーでは、若いキュレーターとベテランのコンサバター（修復師兼管理者）が二〜三日間つきつきりで対応してくださ

ったのだが、その際、私の下手な英語をキュレーターがハンガリー語に訳してコンサバターとコミュニケーションを取るという手順を踏んでいた。若いキュレーターは高等教育の中で英語を習う世代だが、ハンガリーでは当時の四十歳くらいの境に、それより年上の方の外国語はロシア語なので、コンサバターは英語が苦手なのだった。そのため通訳が必要なので私が来たのだと。小学生の頃、ソビエト連邦崩壊により地図帳の記載が変わったことは臆げに覚えていたが、連邦が崩壊したことで、隣国の教育における「外国語」が変わったということを実感する出来事であった。もちろん刺繍は素晴らしかった。寄贈以来どういったものか分からず段ボール箱に詰められていた刺繍作品に私が感動している様子を見て、後日新たに箱を作って収蔵してくださったそうで、大変嬉しい気持ちになった。

チェコでは博物館から少し距離のある大きな収蔵庫で、ジャボニスムコレクターにより集められ寄贈されたという日本刺繍の大変豊かなコレクションを拝見したのだが、その収蔵庫は一風変わった大きな建物であった。聞けば、国営のサーカス団があった場所、その建物を改修して再利用しているのだという。社会主義国時代の残り香に驚いていると、対応いただいたキュレーターから、さらに興味深い話を伺うことができた。彼女の祖父は、同じ村に一生涯住んでいたのに、四つの国を体験したという。チェコ、ソビエト連邦、チェコスロバキア、そしてチェコリパブリック（ただし筆者の記憶によるため、正確ではないかもしれない）。島国日本に生まれ、我々には考えられない感覚である。これが遠い昔の物語ならい

ざ知らず、高々ここ百年の話であり、そのような歴史模様の中で受け継がれてきた作品であることになんとも言い難い感銘を受けた。

旅は発見の宝庫だった。様々な美術館の収蔵庫にお邪魔できたこと、海外に眠る刺繍作品に出会えたことは私にとって大切な思い出である。

京都に来て刺繍に出会い、本当に手探りで始めた近代の刺繍の研究であるが、日本のものを扱いながらも調査フィールドが海外となるという経験をした。さらに、現在、千年以上の歴史と信仰の上に成り立つ北野天満宮に勤めているというのは本当に予想していなかった未来であった。ご縁に導かれ、京都に来ていなかったら絶対になかったであろう人生を歩んでいるが、日々得難い体験をし、楽しく過ごさせていただいていることに感謝している。京都は学生にとっても優しい。街中に、人々の中に学びが散りばめられている。私は本当に京都という街に育てていただいたと思う。よそ者ながら、これからも京都に食らいつき、できるならば恩返しもしていきたいと思っている。

（北野天満宮北野文化研究所室長）

刺繍の近代

A5判上製・カラー口絵八頁十三九四頁／定価 八、二五〇円

▼詳細33頁

中世後期の守護をめぐる

共同研究を終えて

かわおか つとむ
川岡勉

筆者は関西で大学院生活を過ごした後、愛媛に赴任してから既に三五年が立ち、学界の中心的な場所からすっかり遠ざかってしまった。同業者の妻がいるとはいえ、周りに研究者が少ない中で、大内氏・山名氏・畠山氏・河野氏など、中世後期の守護権力に関する研究を少しずつ積み重ねて今日に至っている。こうした孤独な研究環境は、人付き合いが苦手な自分に向いている面があり、マイペースで気楽に研究を進めることができるのは地方に住んでいるメリットと言えよう（昨今、地方大学の良さが失われて、とても気楽とは言いにくなりつつあるが……）。ただし、学界の最前線の情報に疎くなり、研究者の間で何が話題になっているのかつかみにくいという問題がある。また、自分が思いついた考えに対して直接的な反応を受ける機会が乏しく、自説がどの程度通用するのかわ不安になることもある。

そうした筆者にとって、二〇一五年度から五年間、「中世後期守護権力の構造に関する比較史料学的研究」というテーマで科研費を取得し、第一線の研究者に集まってもらって議論する機会が持てたのは大変ありがたいことであった。中世後期の守護について

は、自治体史などでも必ず取り上げられるものの、地域によって権力編成や活動内容に差異があり、一律に論じられない難しさがある。六六ヶ国の地域社会状況を一人でカバーするのは到底できるものではなく、それだけに共同研究が効果を発揮しうる分野と言えよう。

思い起こせば、以前に井上寛司氏から中世後期の守護をテーマとする共同研究の組織化を示唆された記憶がある。井上氏は中世一宮制の共同研究に多くの研究者を組織され、大きな研究成果を挙げられた。一宮制もまた、守護の場合と同じく地域的な多様性を踏まえて議論していかなければならないテーマであり、オルガナイザーとして辣腕を振るわれる井上氏の奮闘ぶりには敬服させられたものである。しかし、行動力に乏しい筆者は、共同研究の実行になかなか足を踏み出すことはできなかった。そうした折に、背中を押して下さったのが古野貢氏であった。日本史研究会の大会の時であったろうか、話しかけてきた古野氏から提案を受け、私が研究代表者となつて科研に応募することになったのである。目ぼしい研究者に参加をお願いして、二年目の応募で無事に採択さ

れた。井上氏と古野氏には、心から感謝申し上げる次第である。

五年間の共同研究では、半年に一度、各地に集まり、研究成果を持ち寄って意見交換する機会を持った。筆者は中世後期の武家の権力編成の基軸を室町幕府―守護体制という概念で把握し、中世国家と地域社会を媒介する存在として守護をクローズアップしてきた。しかし、守護を重視する筆者の見解には、批判が投げかけられることも少なくない。議論がかみ合わない要因を考えてみると、中世後期の守護を論じるための共通基盤が構築できていないところに大きな問題があるように思われた。そこで、守護の受発給文書の一覧表を作成し、議論の土台を作ろうとした。二〇二〇年三月に作成した研究成果報告書『中世後期守護権力の構造に関する比較史料学的研究』には、諸国守護の受発給文書データベースを国別あるいは守護ごとに収録したCD-ROMを添付するとともに、諸国の守護職の変遷やデータベースから読み取れる特徴、研究の手引きなどについて解説した文章を掲載した。これにより、守護の受発給文書を全国的な規模で俯瞰し、関連文書を比較・検討することが容易になったと言える。報告書は主要大学の図書館に寄贈したので、ぜひ活用いただきたい。

定年退職を目前に控えて振り返ると、自分が一世代上の方から授かったものの大きさを感ずることが多い。とりわけ、大学院の先輩であり科研などでもお世話になった前述の井上氏や有光友学氏、そして学生時代の恩師でもある本多隆成氏には、研究者としての生き方を示していただいた。それぞれに共同研究を牽引されたが、仲間内にだけ声をかけるのではなく、広く全国的な視野に立つて

各テーマに適任な研究者を組織された。今回の科研でも、諸国守護を論じるのにふさわしい方をお誘いし、一四名の研究者による共同研究を推進できた。若い頃に自らが多くの財産を得た経験を想起する時、次の世代を巻き込むことで恩返しをしたいという思いもあった。これは、遅ればせながら、次世代に研究のバトンを渡すのに少しでも貢献できればと考える歳になったということであらう。

私たちは、二〇二〇年三月、東京で最終シンポジウムを予定していた。ところが、思いがけなく感染症が流行するに及び、中止せざるをえなくなった。これは残念なことであったが、今にして思えばコロナ禍の影響を受けたのが五年間の最後の段階にとどまったのは幸いでもあった。顔を合わせ、雑談も交え、酒も酌み交わしながら議論できたのは貴重だったと感ずるのである。その一方で、オンラインの活用が新たな可能性を切り開いているのも事実であり、今後とくに中央の学会に参加しにくい地方在住者には恩恵が大きくなっていくことであらう。

さて、シンポジウムで予定していた報告も含めて、共同研究を通じて考えた内容を一書にまとめたという思いから、このたび論文集『中世後期の守護と文書システム』を刊行する運びになった。附録として上記報告書の研究の手引きを改稿したものも収録している。守護を主題に論じることが、中世の国家と地域社会の双方を視野に入れて議論することである。私たちが考えたことを、ぜひお読みいただければと願う次第である。

「硫黄大名」と「銀大名」

鹿毛敏夫

薩摩の阿久根の港で破損したカンボジア帰りの大友船に關して、天正元年（一五七三）九月に島津氏奉行人が大友氏に宛てた返書案文と追書が遺されている。島津氏側は、その船と積荷について、目錄通りに返還することを約しているが、驚くべきは、その目錄概略の「舟・銀子何程・鹿皮―并南蛮進物種々」の文言だ。記述から島津氏が抑留したカンボジア帰りの大友船の主要な積荷が、銀子と鹿皮だったことがわかるのである。

このうち、鹿皮は、一七世紀初頭のいわゆる朱印船貿易で東南アジア諸国から大量に輸入された商品であることは、周知の通り。近世初頭日本の最大の輸入品が、すでに戦国期の天正元年の段階で、九州の戦国大名の派遣船に積まれて日本にもたらされていた事実は極めて興味深いが、それにも増して注目したいのは、その船に「銀子」が積載されていた事実だ。

一六―一七世紀アジアの銀流通については、これまで石見銀山を中心とした日本銀の輸出ばかりが議論されてきたが、カンボジア帰りの大友船の場合は、明らかに東南アジアから銀を輸入している。この事実は、一六世紀後半東アジアの流通システムを論じ

るにおいて、日本を銀の一方的な輸出国として見る固定観念を捨てて、銀の双方向流通という複眼的視点を持つべきことの重要性を物語っている。では、大友氏はなぜカンボジアから銀を輸入したのか。

日本の国内史において、一五世紀から一六世紀半ば（室町期）の中心的鉱物資源および主要輸出資源は硫黄だった。初期の日明貿易を主導した室町幕府は、中国へ輸出する硫黄の調達を、火山が多く、かつ遣明船の航海路上に位置する九州の守護大名島津氏と大友氏に求めた。両氏は、幕府からの調達命令を梃子に、その領国（薩摩と豊後）内の硫黄鉱石の産地と搬出ルートを支配下に収め、また、その領国内には硫黄鉱山を中心とした硫黄産業が発達した。一五世紀から一六世紀にかけての島津氏と大友氏の戦国大名への成長とその富強化は、経済的側面においては、自らの領国内に保有する良質な硫黄鉱山からのこの鉱物資源の恩恵に負う部分が大きく、そうした意味において、島津氏と大友氏は、豊富な硫黄資源（源で室町・戦国期の他大名に優越した「硫黄大名（サルファー大名）」と呼ぶことができる）

一方、一六世紀半ばの戦国末期になると、新たな鉱物としての銀鉱山の開発が進み、灰吹法による精錬技術の進歩によって、銀が主要な輸出資源としての地位を占めるようになった。その銀鉱山からの恩恵を受けたのが、石見大森銀山や但馬生野銀山等の良質な銀鉱山への権益を競合の上で獲得した大内氏・山名氏・尼子氏・毛利氏等である。彼らは、硫黄が主流の時代には、領国内に火山を有さないためサルファーマネーの恩恵を得ることができなかった大名だ。そして一六世紀末になると、国内統一を成し遂げた豊臣政権が各地の主要銀山をおさえて、その利益を独占する。すなわち、一六世紀半ば以降の毛利氏や豊臣氏は、新たな鉱物資源の銀を支配することで他大名に優越した「銀大名（シルバー大名）」の性質を有しているのである。

このように、鉱物資源の獲得競争という観点から見ると、一五世紀から一七世紀にかけての日本社会は、硫黄を征するサルファーマネーの時代から、銀を征するシルバーマネーの時代に大きく転換していったと言える。この中心的鉱物資源の時代転換のなかで、室町期から戦国中期にかけて優越的な立場にあった島津氏と大友氏は、不利な状況に追い込まれた。九州の島津・大友領国は、硫黄鉱山のメッカであったが、良質な銀を産する鉱山に恵まれていなかったからである。

銀を主とする貨幣経済は諸大名領国の垣根を越えて幅広く浸透する性質を有していたが、それでも、良質な銀鉱山を保有する大名領国とそうでない大名領国とは、貨幣経済の発展に明確な温度差が生じつつあった。銀資源獲得競争のなか、有効な銀山を有

さない大友義鎮がとった政策が、一五七〇年代に締結したカンボジア国王との外交関係を利用して東南アジアから銀を輸入するという手段だった。豪商仲屋氏を商人司として天正元年に大友氏がカンボジアに派遣した交易船は、豊後産硫黄を主要な積荷としてカンボジアに輸出し、帰路では、豊後で不足していた銀を主たる輸入品として積み込み、鹿皮およびカンボジア国王からの贈答品とともに九州にもたらしたのである。

このように、一五世紀から一七世紀にかけての武家社会日本は、硫黄山を領有する「硫黄大名」が経済的に優越した時代から、銀山権益を獲得した「銀大名」が優越する時代へと転化していった。島津氏、大友氏から毛利氏、豊臣氏までの諸大名が各鉱物資源の獲得に競合する数百年間の時代を経て、やがて一七世紀初頭に成立した徳川政権は、硫黄と銀の両方の権益を全国的に獲得して、安定した統一政権を実現した。初期の江戸幕府は、サルファーマネーとシルバーマネーの双方を優越的に獲得した徳川氏の鉱業政策によって経済的に支えられたものとも言えよう。そして、その後の近代の歴史は、全国で炭鉱開発に伴う産業が隆盛を極めた「石炭」の時代を経て、二〇世紀の「石油」⇨オイルマネーの時代へと推移していく。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

鹿毛敏夫編

『硫黄と銀の室町・戦国』

A5判上製・四〇〇頁／本体九、三三〇円

▼詳細35頁

若狭町熊川区の山車の見送幕

かわ なみ ひさし
川波久志

(福井県立若狭歴史博物館主任)

福井県は敦賀市と南越前町の境界である木の芽峠でもって、敦賀市を除く旧越前国を嶺北地方、旧若狭国と敦賀市を含む嶺南地方に分けられる。

嶺南地方では敦賀祭や小浜放生祭、高浜七年祭が大規模な山・鉾・屋台の祭礼として知られており、それらから影響を受けた祭礼が周辺に広がっている。今回紹介する見送幕を所有する若狭町熊川区の祭礼も小浜放生祭の影響を大きく受けていると考えられるが、地理的な条件を考えればそれだけではないであろう。

若狭町熊川区は近江と若狭の境にあり、若狭と京を結ぶ若狭街道(いわゆる「鯖街道」)、近江今津(滋賀県高島市)を結ぶ九里半街道が通る交通の要衝であり、中世以降に大きく栄えた。江戸時代には宿場町となり、小浜藩により奉行所が置かれるほどのところであった。宿場町の面影は今に残されており、平成八年(一九九六)には国の重要伝統的建造物群保存地区へ選定されている。年間を通じて多くのイベントの開催、道の駅の設置など、観光客も多く立

ち寄るところとなっている。

見送幕は、毎年五月三日に行われる白石神社の祭礼の山車に付けられる。熊川区では山車を「ヤマ」と呼んでいる。白石神社は熊川区の氏神であり、祭神は伊勢から勧請されたとも、若狭彦神社(小浜市)から勧請されたともいわれている。

白石神社の祭礼で山車が出るようになったのは、明和九年(七七)五月のことである。白石神社社殿屋根の葺替、上屋の新築竣工に祝いとして山車を出したと記録がある。熊川区は上ノ町、中ノ町、下ノ町の三地区に分かれており、各町から一基ずつ山車が出されたが、大火による焼失などを経て一基となった。昭和三八年(一九六三)からは、老朽化などのため、山車の巡行は休止していた。その後、トラクを山車としていたが、平成一三(二〇一四)年に文化庁の「ふるさと文化再興事業」により、山車一基を新造し、平成一五年に巡行が復活した。山車新造に伴って、見送幕の一つを複製製作し、祭礼の際にはそれを使用している。また、山車は



「白石神社祭山車綴錦見送」 右より「綴織百子遊戯図」、「綴織琴棋書画図」、「綴織胡人雅話図」（熊川区所蔵、福井県立若狹歴史博物館寄託、写真提供：若狹町歴史文化課）

白石神社祭礼だけでなく一〇月開催のイベント「熊川いづく時代村」でも公開されている。

見送幕は入手時期も特定されており、意匠や織の技術から京都西陣で製作されたものと考えられ、当時の技術や作風を伝えるものであり、また、大火などから守られ、損傷や褪色も少なく、保存状態も良好であるということで、「白石神社祭山車綴錦見送」として、昭和六十一年には上中町（現若狹町）指定文化財、平成一二年に県指定有形文化財（工芸品）となった。見送幕には「綴織百子遊戯図」、「綴織琴棋書画図」、「綴織胡人雅話図」の三点があり、現在は福井県立若狹歴史博物館に寄託されている。

上ノ町は文政七年（一八二四）に綴織百子遊戯図を、中ノ町は文政五年に綴織琴棋書画図をいづれも京より購入したと記録がある。特に中ノ町は有志六六名が十三両で大澤屋甚兵衛から購入したとある。下ノ町は記録がないものの綴織胡人雅話図を同時期に京より購入したと見られている。

見送幕は、三点とも上からおおよそ四分の一で図案を分けて描かれている。こうしたものは京都の祇園祭や長浜曳山祭（滋賀県長浜市）、大津祭（滋賀県大津市）でも見ることができる。

綴織百子遊戯図は、上部には四本爪の正面龍と彩雲、下部には唐子たちが描かれている。麒麟に乗った唐子のほか、琴、棋、書、画に遊ぶ唐子たちや、釣り、舟遊びなどの様々な遊びに興じる唐子たちが孔雀や鶴などといった瑞鳥とともに描かれている。百子は子孫繁栄を表し、麒麟や瑞鳥などめでたさが表現されている。同様の意匠は京都祇園祭の北観音山や長浜曳山祭の高砂山、大津祭

の源氏山や狸々山の見送幕にも見られる。北観音山のものは明代、源氏山のものは清代の製作であり、そうした中国のものに倣って京で製作されたのではないかと考えられている。なお、平成一三（一四）年に複製製作したのはこの綴織百子遊戯図であり、子供たちの健やかな成長を願って選んだという。

綴織琴棋書画図は上部には一對の鳳凰と彩雲、下部には琴、囲碁、絵画、書を楽しむ高士と童子が描かれている。鳳凰は左右で配色や尾羽の表現に相違がある。そのほか、奥には瑞雲と瀑布、鳥二羽が飛ぶ姿や梅花、手前には鴛鴦二羽が池に浮かぶ姿が描かれている。高士が九人という陽数でめでたさが表されている。琴棋書画が伝統的な画題である点から、選ばれたのであろうか。

綴織胡人雅話図は先に紹介した二点とは少し趣を異にする。特に下部は独特の構図のものと思われる。上部に彩雲と日輪、そして鳳凰が、下部中央には三人の人物、その周囲には唐草と牡丹、そして獅子四頭が描かれている。獅子は口の開閉から阿吽（あうん）と考えれば二対とした方がいいのかもしれない。なお、上部の鳳凰は阿吽となつている。上下を分ける帯は入れず、雲で緩やかに分けている。人物は、甲冑姿で左に棒状のものを差し出す、眉も髭も豊かに蓄えた人物、やはり甲冑姿で右に矛を持ち、口髭、顎髭を蓄えた人物、中央には胴に鎧を着ているように見える人物が描かれている。服装、肌の色などが相違することから国などの異なる三者によって何かがなされているように見えるが、何をモチーフにしているのかは判然としない。もし、ご存知の方がいらっしゃれば、ご教授いただきたいものである。

熊川区が三つの山車を持ち、こうした見送幕を購入して祭礼が行われていたことは往時の繁栄を感じさせる。残念ながら、令和二年、三年（二〇二〇、二一）と福井県内の祭りや行事の多くは中止や縮小を余儀なくされている。白石神社の祭礼も例外でなく、最低限まで縮小され、山車の巡行は行われなかった。早々に時世が落ち着き、山車の巡行が行われるの願っている。

福井県立若狭歴史博物館

【所在地】

〒917-0241
福井県小浜市遠敷2丁目104番地1
TEL:0770-56-0525
FAX:0770-56-4510
ホームページ <https://wakahaku.pref.fukui.lg.jp/>

【交通アクセス】

■JR東小浜駅から東へ徒歩7分
舞鶴若狭自動車道小浜ICから東へ5分

【開館時間】

9時～17時

【休館日】

第2第4月曜日はか、当館指定日

【入館料】

・一般／310円 高校生以下・70歳以上／無料
(70歳以上の方は、年齢がわかるものをご提示ください)
※有料の方が20名以上の団体は2割引
※障がい者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料

▼荒木浩著『今昔物語集』の成立と対外観』を一冊目として、「思文閣人文叢書」を発刊いたしました。かつての「思文閣史学叢書」のように、学界で長く読み継がれる基本図書を本叢書から生み出していく所存です。新たな「人文叢書」では、いわゆる歴史学に止まらず、幅広く人文学の良書を世に聞きたいと思っています。小社のトップブランドと位置付け、不定期で刊行いたします。装幀も、本文組も、すべて特別仕様です。これからの展開にぜひご期待ください。

▼このたび、書籍の倉庫を京都から埼玉に移し、商品管理・出荷業務を外委託することにいたしました。今後は、書籍流通の中心となっている関東から出荷いたしますので、より早く商品をお届けすることが可能になります。一方で、京都の社屋には在庫を置きませんので、ご来社による購入には対応できなくなります。ご不便をおかけすることもあるかと存じますが、ご理解いただければ幸いです。近年、書籍の流通は日々大きく変化しています。そうした中で、在庫を流通の中心地に置くことで、変化に対応できる体制を整えてまいります。

▼倉庫の移転にあたって数万冊の本の引越作業。たくさんの方が途方もなく長い時間をかけて書き残した知の集合体の重みを全身で感じた夏の終わりでした。(R)

▼大型企画『校訂 原本 古画備考』刊行を控え、インタビューでは関係各位の長きにわたる、並々ならぬ熱意に圧倒されました。この学問の熱量を継承する出版社であり続けたい。(大)

▼昨年から続くコロナ禍で、自分には引きこもりの才能があると確信しました。出かけるのは楽しいですが、一歩も家から出なくて良い日々もまた幸福感があります。(m)

▼最近近所の川で釣りを始めました。ひとり水面を眺めていると心が無になって安らぎます。釣果がゼロでも気にならないことを思うに、本質は釣りではなく瞑想なのかもしれません。(n)

▼「彦根の池」絵葉書(個人蔵)／『図説 大名庭園の近代』より

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.113

2021(令和3)年9月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン HON DESIGN

校訂 原本 古画備考(全5巻)

今秋刊行予定 A5判上製函入・総三二四〇頁／定価七七、〇〇〇円

岡倉天心の座右にもあった、江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に再現。近代に編集された『増訂 古画備考』を大胆に革新。現代の視点から、美術史成立前夜における江戸の学知の達成を世に問い直す、古画備考研究会による永年の成果がここに完結。

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎編著『古画備考』巻一〜四十八(嘉永3=1850年起筆)を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻、項目索引を付す。

◎原本に含まれない巻四十九〜五十一は東京国立博物館蔵『古画備考』(図書寮印本)を底本に同様の校訂を行う。

◎太田謹増訂本 明治36=1903年初版、明治45=1912年校訂増補第二版、弘文館刊／昭和45=1970年復刻、思文閣刊)と、その底本である東京国立博物館蔵本(図書寮印本)より校合を行いその校異を註に記載。

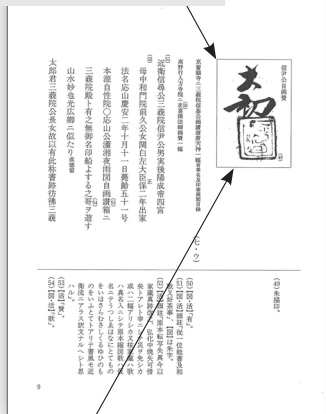
『古画備考研究会』

翻刻・校訂分担者：相澤正彦(成城大学)／五十嵐公一(大阪芸術大学)／井田太郎(近畿大学)／出光千子(青山学院大学)／出光美術館)／北野良枝(東京藝術大学)／高橋真作(文化財活用センター)／東京国立博物館)／玉蟲敏子(研究会代表、武蔵野美術大学)／鶴岡明美(昭和女子大学)／並木誠士(京都工芸繊維大学)／成澤勝嗣(早稲田大学)／野口剛(根津美術館)／畑靖紀(九州国立博物館)／本田光子(愛知県立芸術大学)／宗像晋作(大分県立美術館)／山口真理子(城西国際大学水田美術館)／吉田恵理(静嘉堂文庫美術館)

(以上、本書に関わるメンバーのみ。＊は編集委員、50首順)

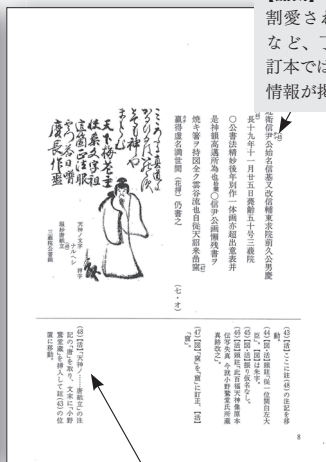
【 組み見本：巻三 廷臣二 近衛信尹の項 】

増訂本では区別できなかった貼紙箇所を明示。



【画像】図、署名、印、画賛等の部分は、原本画像をそのまま掲載。原本に忠実なレイアウトを復原。

【翻刻】増訂本編集時に割愛されていた小字註など、丁寧に翻刻。増訂本では知りえなかった情報が掲載されている。



【脚註】図書寮印本、太田謹増訂本との校異を掲載。どのように校訂されたかが、簡潔にわかる。

「各巻のおもな内容」

- ◆第1巻◆ 巻一 帝室・天皇・親王など／巻二・三 延臣（皇后・廷臣など）／巻四・六 武家（江戸期までの武家、大名など）／巻七・十上 釈門（古期までの僧／巻十下 松花堂流（松花堂昭乗とその門人））
- ◆第2巻◆ 巻十一 釈門（黄蘗僧、神僧、僧侶など）／巻十二上 詩人／巻十二下 和歌・連俳・茶香・雑／巻十三・二十名画（平安中期までの記録上の専門絵師、平安中期・鎌倉初期の絵師や宮廷画人、鎌倉・室町初期の画人・仏師、曾我派、阿弥派、雪舟とその門人など）
- ◆第3巻◆ 巻二十一・二十八 名画（室町後期・桃山期の水墨画逸伝画人、関東画人、雲谷画人、又び雪舟末流、長谷川派、海北派、特定の画系に属する画人、長崎画人、文人画人、天明・寛政年間の画人）／巻二十九・三十 名画（近世・文化・文政年間の画人（広益諸画家名録序「画業要略」山中龍舌「画意」文川画譜等の写本）
- ◆第4巻◆ 巻三十一 浮世絵師伝／巻三十二 巨勢家（大和絵の巨勢・宅鷹・住吉・芝・栗田口の各流派）／巻三十三 佐家（土佐派）／巻三十四 住吉家（住吉派、板谷派）／巻三十五 光悦流／巻三十六・三十九 狩野譜（中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、諸系図）／巻四十 狩野門人譜
- ◆第5巻◆ 巻四十一・四十三 狩野門人譜（中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、駿河台狩野家、浜町狩野家の各門人とその系譜）／巻四十四 英流（英一蝶以下の本流とその門人）／巻四十五 禁裏造営部類（御所・大坂城・江戸城・寺院等の障壁画・画題や作者を記した様々な史料、朝鮮に贈った屏風資料など）／巻四十六・二十四 孝狩野家拾人寄合書（印譜、略画譜、朝間の新聞録など）／巻四十七 倭絵名目（物語・史書・歌集・随筆など文獻資料に言及された絵画作者、組織・障子・絵壁・屏風の種類を画題・描法など）／巻四十八 巻物画像種類（障壁画、絵巻物、肖像画部、仏画、神道絵画、雑類など）／巻四十九 長崎画人伝／巻五十・五十一 高麗朝鮮画人伝

本研究は「江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究…『古画備考』を中心に」（第一期二〇〇三～二〇〇五年、第二期二〇〇六～二〇〇八年）年度科学研究費補助金基盤研究（B）により推進し、本書は出光文化福祉財団の出版助成（二〇二二年度二か年）を受けています。

…【推薦のことば】…

▼東洋美術史研究に必備の書

『古画備考』は最も永く用いられてきた画家人名辞典として、東洋美術史研究の基本文献であり、日本に伝存する作品を研究する際に、今でも最初に確認・参照すべきものである。今回の刊行では久しく公開が待ち望まれた自筆原本の全容、さらに各作品情報の刊行ごとの変更過程が明らかにされる。それは、近代日本における「美術史」成立過程の様々な問題を提起することになる。東洋美術史研究に必備の書！一九七〇年復刻本に替わる新たなパイプルの登場である。

——板倉聖哲（東京大学 東アジア絵画史）

▼日本美術史研究への福音

待ちに待った刊行である。玉蟲敏子氏を中心に日本美術史研究の精鋭が集まれ、朝岡興偵自筆原本「古画備考」校訂の研究会が長く続けられてきた。その地道で尊い活動の成果がこうして世に出た。日本美術史にとっての福音である。朝岡興偵の知識と洞察の総体「古画備考」は前近代の古書画研究の達成であり、その出版は近代における日本美術史研究の黎明でもあった。それを二〇二一年の今、改めて丁寧な読み込みによる原本の全翻刻、校訂の姿で手に取ることが出来る。江戸の学知に触れ、思いを新たにさらなる研究が始まる。恩恵は計り知れないほど大きい。

——佐野みどり（『國華』主幹 日本美術史）

▼美術史への架橋

近世を「画史画伝」、近代を「美術史」の時代とするなら、「古画備考」は両者を架橋した存在だ。画人伝、縮図、印章、落款等の膨大な情報、伝記は美術史の基盤となり、縮図等は失われた歴史を今に垣間見せる。

早くから史料としての重要性が認識されながら、原本・写本・増補本の関係が問題となっていた。それが玉蟲さんたち研究チームの長年の成果で、第一級の史料翻刻として実現した。当時最高の学術知と歴史風景を目撃できるだろう。

——佐藤道信（東京藝術大学 近代日本美術史）

▼美術史学史研究の基盤

『古画備考』は日本美術史の基礎文献である。この度、玉蟲敏子氏をはじめ第一線の研究者によって朝岡興偵の自筆稿本が校訂され、全翻刻されたこと意義は絶大である。

本書は「古画備考」の原本の記載内容や落款・印章の画像、朝岡による縮図を収載し、幕末の古書画研究の実態をつかめると同時に、近代に『古画備考』が世界中に及ぼした影響をたどれる。

今後の日本絵画史研究、美術史学史研究の基盤となる本書の出版を喜ぶたい。

——ユキオ・リビット（ハーバード大学 美術建築史）

川本慎自著

中世禅宗の 儒学学習と科学知識

2月刊行

A5判上製・三二〇頁／定価六、一六〇円



中世の禅僧たちがつもっていた卓越した経営手腕や知識・技術は何に由来するのか？経済活動と学問、中世禅宗の二つの側面を架橋することで、禅宗寺院の果たした役割の全体を明らかにするとともに、近世につながる科学知識の萌芽についても見通す。

河内祥輔（北海道大学名誉教授）

小口雅史（法政大学教授）

M・メルジオヴスキ（シウツトガルト大学教授）

E・ヴィダー（チュービンゲン大学教授）

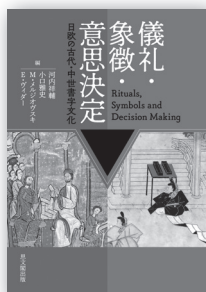
編

儀礼・象徴・意思決定

—日欧の古代・中世書字文化—

1月刊行

A5判上製・二七二頁／定価八、八〇〇円



日本と欧州、ユーラシアの東西に遺された古文書の比較研究から、発給者の意思形成にかかわる儀礼や象徴の在り方はどのように読み解けるのか。それぞれの国の研究者が集い、古代・中世における皇帝・国王文書から社会構造の姿容をあつづけることを試みた国際シンポジウムの成果論集。

法隆寺編

法隆寺史上—古代・中世—〔2刷〕

日本最初の世界文化遺産である法隆寺1400年におよぶ歴史を通観する。

定価七、四八〇円

京都大学文学部日本史研究室編

兵範記（四）・範囲記・知信記

『兵範記』シリーズ最終巻。兵部卿平信範（一一二一～八七）の日記『兵範記』及び関連史料を収録。

定価三三、〇〇〇円

下坂守著

中世寺院社会と民衆—衆徒と馬借・神人河原者—

『王法弘法相依論』に貫かれた中世寺院社会の具休像に光を当てる一書。

定価八、二五〇円

早島大祐編

京都大学史料叢書六 西山地藏院文書

軍人の内閣というフィルターを通して戦前の内閣史に光をあてる。影印・翻刻に、解説を加え、『西山地藏院文書編年目録』を付記。定価一四、三〇〇円

表示価格は税込

小野芳朗 (京都工芸繊維大学教授)

本康宏史 (金沢星稜大学教授)

中嶋節子 (京都大学教授)

三宅拓也 (京都工芸繊維大学助教)

編著

図説 大名庭園の近代

9月刊行予定

B5判上製・二〇四頁／定価 六、六〇〇円

現在多くの大名庭園は、近世の姿への回帰を目指して整備・保存が行われ、訪れる観光客も近世の風景が広がっていることを期待する。そうした視点からは、近代の歴史がすっぱりと抜け落ちているのではないかと、明治維新以降、激動の時代をくりぬけるなかで、大名庭園は大きな変化を経験した。旧藩主の私的な空間から市民たちの憩いの場となり、文明開化を象徴する諸施設が置かれて博覧会などの会場となる。その一方で、旧藩主を顕彰する場ともなった。各庭園、各都

市の事情を背景に、じつに多様に変化し、さまざまに利用されたのである。

いまの大名庭園からは失われてしまった近代の姿を、従来注目されなかった独自の視点から収集した画像資料(絵図、地図、古写真、絵葉書、ポスターなど)とともに紹介。現在の各庭園の空間に近代が与えた影響を読みとくとともに、文化財の活用が叫ばれる時代にあつて、近現代の風景をどう保存・活用できるのかを考える端緒を拓く。



春月園 園楽林泉 松高 寛政



園楽下あたりの見所より文相園公御常 明治11年

小野芳朗・本康宏史・三宅拓也著

大名庭園の近代

近代の歴史を掘り起こし、大名庭園の変容を明らかにする。

定価 八、八〇〇円

米家泰作著

森と火の環境史「オンデマンド版」

「人為の火」という観点——近世・近代日本の焼畑と植生——から、日本の焼畑の歴史地理と環境史を再考する。

定価 八、四七〇円

岡山後楽園
金沢兼六園
水戸偕楽園
高松栗林公園
彦根玄宮楽々園

それぞれの近代
小石川偕楽園
広島縮景園
鹿児島仙巖園
沖縄識名園

表示価格は税込

荒木浩（国際日本文化研究センター教授）著

【思文閣人文叢書】

『今昔物語集』の成立と
対外観

10月刊行予定

A5判上製・四六〇頁／定価 九、九〇〇円

平安末期に成立したとされる説話集『今昔物語集』と、その成立に直接的に影響したとされる11世紀の源隆国「宇治大納言物語」。それぞれの成立環境を主な分析対象に据え、対外観という視点のもと、古代・中世説話集の成立をめぐる仏教文化史の潮流を論じる。

倉本一宏編

説話研究を拓く——説話文学と歴史史料の間に——
説話文学と歴史史料の問を往還しつつ、説話研究に
新たな地平を拓く。

定価 九、九〇〇円

工藤美和子著

賢者の王国 愚者の浄土

——日本中世誓願の系譜——

日本浄土思想史に新たな知見を示す。

定価 七、一五〇円

【予定目次】

序 論 対象としての説話集史素描
仏教文学としての説話集と対外観

第一部 古代説話集の成立と対外観

第一章 仏教類書の影響と説話集の存立——「諸教要集」をめぐる
第二章 「三宝絵」の捨身と孝——尊子内親王をめぐる
第三章 投企される「和国」性——「日本往生極楽記」改稿と和歌陀羅尼をめぐる

第二部 源隆国と「宇治大納言物語」——説話集と作者の環境

第一章 源隆国の才と説話集作者の資質——研究史再考から「宇治大納言物語」へ
第二章 源隆国晩年の対外観と仏教——宇治一切経蔵というトポスをめぐって
補 論 藤原忠実の「家」と「父」そして「子」——言談・説話の中の院政期

第三部 『今昔物語集』の成立と宋代

第一章 『今昔物語集』成立論の環境——仏陀耶舎と慧遠の邂逅をめぐって
第二章 『今昔物語集』の成立と宋代——成尋移入書籍と『天竺僧史略』などをめぐって
第三章 かへりきける阿部仲麻呂——『今昔物語集』と『新唐書』そして「王佐日記」異文のことなど

第四章 『今昔物語集』の宋代観と和歌逸話の形成
補 論 編纂動機と逸話配列——紀貫之の亡児哀傷と『国文学史講話』をめぐる

終 章 世界叙述と説話文学史——矜持する和語

大津透・池田尚隆編

藤原道長事典——御堂関白記からみる貴族社会——

最新の研究成果にもとづいた新たな平安朝の貴族社会像を提示。

定価 六、六〇〇円

三浦俊介著

神話文学の展開——貴船神話研究序説——

貴船神話をモチーフとして、
その伝承や資料から神話文学論を展開。

【オンデマンド版】

定価 一三、二〇〇円

川岡勉（愛媛大学教授）編

中世後期の守護と文書システム

11月刊行予定

A5判上製・五七五頁／定価 二、一〇〇円

- ◎守護の発給文書の分析を中心として、守護の権力構造や分国支配、中世後期の都鄙関係などを全国的な規模で説明
- ◎東北から九州まで網羅的に収集・データベース化した14～16世紀の守護の受発給文書を土台に、その傾向や特徴に即した各地域守護の比較研究・分析

石井伸夫・仁木宏編

守護所・戦国城下町の構造と社会

—阿波国勝瑞—

ユニークな空間構造をもつ一六世紀の地方都市・勝瑞の姿を解き明かす。

定価 七、二六〇円

浜口誠至著

在京大名細川京兆家の政治史的研究

細川京兆家の政治的位置を明らかにすることで、戦国幕府政治の構造的特質を解明する。

定価 七、一五〇円

〔予定内容目次〕
まえがき（川岡勉）

第一部 諸国守護の発給文書

- 第1章 中世後期東国における守護の判物の成立と展開
- 第2章 戦国期越前朝倉氏発給文書にみられる構内折書状
- 第3章 南北朝・室町期における六角氏の家督交替と文書発給
- 第4章 畠山氏の権力構造と文書発給
- 第5章 戦国期播磨における守護方文書の発給動向

第二部 諸国守護の権力構造と分国支配

- 第6章 中世後期東国守護に関する一試論
- 第7章 伊賀・伊勢・志摩国守護仁木氏
- 第8章 山名氏の同族連合体制と庶流守護家—伯耆山名家を中心に—
- 第9章 守護の権力編成と国・被官人—大内氏分国を中心に—

第三部 中世後期の都鄙関係

- 第10章 今川氏と京都
- 第11章 和泉上守護細川氏の書状に関する一考察—細川常有父子の私信を中心に—
- 第12章 西国の地域権力の対京都政策（関係）と在京雄掌
- 第13章 南北朝・室町期島津氏の対幕府関係

総論 —中世後期守護の歴史的的位置—
付録 中世後期守護研究の手引き

佐々木倫朗著

戦国期権力佐竹氏の研究（オンデマンド版）

常陸国佐竹氏の考察を通して、東国に存在した政治権力の特徴を明らかにする。

定価 六、七二〇円

亀田俊和著

室町幕府管領施行システムの研究

管領施行システムの沿革と意義を分析・解明する。

定価 一〇、七八〇円

表示価格は税込

東寺文書研究会編

東寺執行日記一

来冬刊行予定

A5判上製・三〇〇頁／定価一五、四〇〇円

執行は長官僧である東寺長者系列の寺内の要職。堂舎・仏像・各種儀式の法具などの管理・保全の責任者であり、寺内の庶務を担当した。本日記はその公務記録で、鎌倉時代末期から近代にいたる長大な記録のうち、本シリーズでは中世部分を翻刻する。業務記録として東寺の歴史を伝えるだけのみではなく、当時の政治・社会の中心である京都政界・社会に関する、長期にわたる定点観測の貴重なデータを提供する。全三巻予定。

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書十四 又函二

東寺に襲蔵されてきた日本最大の古文書群を翻刻。最新刊。

定価 一四、八五〇円

伊藤俊一・富田正弘・本多俊彦編

東寺廿二口供僧方評定引付全4巻

編年順に編集・翻刻し、校定・注釈（とくに関連文書の注記）を加える。

定価 七、一五〇円

【第一巻予定目次】

元徳 二年
建武 四年
貞治 元年、二年、三年
応永 三十五年
永享 三年、四年、五年、六年、七年、八年、九年、十年、十一年、十二年、十三年
嘉吉 二年、三年、四年
文安 元年、二年、三年、四年、五年、六年
宝徳 二年、三年、四年
享徳 二年、三年
長祿 四年
寛正 四年、五年

東寺文書研究会編

東寺文書と中世の諸相

東寺文書に魅せられた中世史研究者たちの研究成果。

定価 二一、一〇〇円

上島有・大山喬平・黒川直則編

東寺百合文書を読む―よみがえる日本の中世―

東寺百合文書の中から50点を選び魅力の一端を紹介する、格好の入門書。

定価 二、七五〇円

沓澤宣賢（東海大学名誉教授）

ペーター・パンツァー（ボン大学名誉教授）

宮田奈奈（ウィーン大学神学部宗教学科研究員）

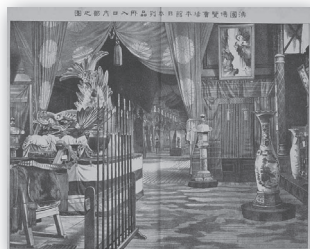
編

ウィーン万国博覧会と

明治日本（仮）

今冬刊行予定

A5判上製・三三〇頁／価格未定



博覧会場本館の日本展示
（『演習博覧会参同記要』より）

オーストリア・日本双方の視点、日本政府に関わった外国人の視点から日本のウィーン万博参加を複眼的に検討することに加え、各分野で進む最新の研究を集めることで、従来の「殖産興業政策への貢献」という評価にとどまらないウィーン万博像を描出する。

佐野真由子編

万博学

―万国博覧会という、世界を把握する方法―

B5判上製・五五六頁／定価九、三五〇円

万博学、それは万国博覧会という研究対象を通じて可能になる、大きな学際的人間学の営みである。32本の論考で、万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。万国博覧会とは「世界を把握する方法」なのだ。

佐野真由子編

万国博覧会と人間の歴史

万博から、人間の歴史が見える！ 多様な領域の研究者、官民の実務者による共同研究の成果。

定価一〇、二〇〇円

寺本敬子著

パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生

日仏の史料を駆使し、ジャポニスムの誕生を解き明かす。

〔4刷〕

定価七、一五〇円

ジャポニスム学会編

ジャポニスム入門

各国別の個性的な展開をやさしく読み解き、ジャポニスムの全体像に迫る。

定価三、〇八〇円

並木誠士編

近代京都の美術工芸―制作・流通・鑑賞―

近代京都の美術工芸作品や資料の評価、位置づけを問い直す19篇。

定価二、二〇〇円

表示価格は税込

藤木晶子（京都市立芸術大学非常勤講師）著

竹内栖鳳 水墨風景画にみる画境

今冬刊行予定

A5判上製・三五二頁／本体 六、五〇〇円

本書では竹内栖鳳の後半生の絵画創作について、水墨風景画の制作に焦点を当てて論考する。近代日本美術において栖鳳晩年の水墨風景画の絵画史上の価値を明示するとともに、これまで画家の前半期に集中していた栖鳳の画業の評価を再考し、彼の後半期の絵画創作の意義を提唱する。

〔予定目次〕

第一章 栖鳳晩年の水墨風景画の全貌

潑墨・破墨の画法と栖鳳作品／大正末期頃～昭和七年頃／昭和八年頃～昭和九年頃／昭和十一年頃～昭和十六年／水墨風景画制作の変遷

第二章 「淡交会展」における挑戦

淡交会の特徴と意義／第三回淡交会展／第七回淡交会展／淡交会における出品画家の動向

第三章 潮来風景の写生取材の実態

写生帖の素描分析／藤岡鑛二郎の著述／竹内栖鳳の著述／写生取材から絵画化への推移

中川馨著

動物・植物写真と日本近代絵画

多彩な近代美術家たちと写真家との交流を浮き彫りにする。

定価 五、五〇〇円

古画備考研究会編

原本『古画備考』のネットワーク

江戸後期の知識人によるネットワークが日本の歴史に寄与した一端を解明する。

定価 一〇、二〇〇円

第四章 中国と潮来の風景表現の連繫

中国訪問と同地の風景画／中国風景画に迫る表現の契機／潮来風景画における表現の変遷／水墨風景画に至る絵画創作の展開

第五章 「栖鳳紙」開発と作画意図

日本画の基底材に関する動向／栖鳳紙の開発着手から完成まで／栖鳳紙に対する試験分析／紙本と絹本を巡る栖鳳の思索

第六章 近代水墨画と栖鳳の画境

近代の水墨表現の推移／東京画壇の水墨画／京都画壇の水墨画／南画系の水墨画／洋画出身者の水墨画／栖鳳の水墨画の位置付け

富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

通天楼日記——横山松三郎と明治初期の写真・

黎明期の日本写真史・洋画史・印刷史の実態を明らかにする一級の史料群。

洋画・印刷
定価 一八、〇四〇円

稲賀繁美編

海賊史観からみた世界史の再構築

文化交渉・交易——交易と情報流通の現在を問い直す——全般における「海賊行為」を総合的に再検討。

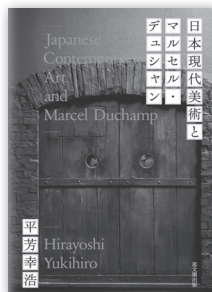
定価 一五、四〇〇円

平芳幸浩著

日本現代美術と マルセル・デュシャン

4月刊行

A5判上製・三四八頁／定価 八、八〇〇円



なぜこれほどまでに、日本はデュシャンを好んできたのか。

1920年代から80年代における日本の美術界および文化批評の場でのデュシャン受容の様態を確認し、日本の前衛美術や批評言語がどのように自らの方向性を見出ししてきたかを分析・考察する。

山田奨治
ジョン・ブリン 編

鈴木大拙 禅を超えて

A5判上製・四五〇頁／定価 八、二五〇円



西洋における禅ブームの立役者であり、日本文化理解の礎を作った鈴木大拙。彼の活動、思想を総体として捉えることで、「禅の伝道者」としての従来イメージを超え、「今までにない大拙像」へと挑戦する。

中嶋晋平著

戦前期海軍のPR活動と世論

日本海軍にまつわる公文書や新聞報道を手掛かりにPR活動を分析。

定価 二、五五〇円

竹内幸絵・難波功士編

広告の夜明け——大阪・萬年社コレクション研究——

広告業界をさまざまな角度から活写する。

定価 五、七二〇円

鄭銀珍著

韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム

浅川兄弟の活動を軸として、近代における韓国陶磁の全容を解明。

定価 一五、四〇〇円

岩本真一著

近代日本の衣服産業——姫路市藤本仕立店にみる展開

藤本家の家史料を中心に、新たな切り口から近代衣服産業の展開を描く。

定価 七、七〇〇円

表示価格は税込

植木行宣監修

福原敏男・西岡陽子・橋本章・村上忠喜編

山・鉾・屋台の祭り研究事典

4月刊行

A5判上製・八〇〇頁／定価七、一五〇円

八反裕太郎著

描かれた祇園祭

—山鉾巡行・ねりもの研究—

第14回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞

A5判上製・九七〇頁／定価一六、五〇〇円

公益社団法人京都染織文化協会監修／北野裕子著

忘れられた祭り 京都染織祭

—恐慌・戦争・復興を駆ける— [Shibunkaku Works]

長年謎に包まれていた祭りの実態を新出史料から解き明かす。定価一、六五〇円

岩間香・西岡陽子編／京極寛写真

祭りのしつらい—町家とまち並み—

町家とまち並みを飾る祭りの文化を紹介。

定価二、四二〇円



本事典は、ユネスコ無形文化遺産代表一覧表に「山・鉾・屋台行事」として記載された、33の国指定重要無形民俗文化財をはじめとする125の山・鉾・屋台の祭りをとりあげる。さらに研究者による専門的論考・コラムもあわせて収録し、今後の研究、伝承、保存などの一助とせんがために編んだものである。



祇園祭を主題に描かれた絵画作品は数多く、その膨大さゆえに、今までの研究には祇園祭の全体を見渡す視点が大きく欠落していたといわざるを得ない。本書は、祇園祭の山鉾巡行ならびに江戸の中期に始まる神輿洗のねりものを描いた絵画作品、つまり「描かれた祇園祭」から、その祭儀の変遷を読み解く試みである。

岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編

「月次祭礼図屏風」の復元と研究

—よみがえる室町京都のかがやき—

応仁の乱以前の京都を描いた唯一の屏風、ここに復元——。定価一七、六〇〇円

橋本政宣・宇野日出生編

賀茂信仰の歴史と文化〔神社史料研究会叢書Ⅵ〕

神社史料の有効活用・研究の深化普及を目的に賀茂信仰を特集。

定価八、五八〇円

中川理編

空想から計画へ編集委員会編

空想から計画へ

—近代都市に埋もれた夢の発掘—

4月刊行

A5判上製・七五〇頁／定価 一四、三〇〇円



都市構想を「空想」として見立てれば、それが実際に都市空間に落とし込まれて、現実の「計画」となっていく過程にこそ、近代都市史研究の根幹をなすテーマが見出せるのではない。編者・中川理のこうした認識を「お題」として、本書の25本の論考は集められた都市を読みとく、より広範で自由な議論を立ち上げる契機とするために――。

大場修編著

占領下日本の地方都市

—接收された住宅・建築と都市空間—

5月刊行

A5判上製・四六四頁／定価 八、二五〇円



戦後、占領軍によって日本各地で不動産の接收が行われた。民間住宅からホテルやデパートまでが取り上げられ、欧米流の生活に適するように改造、新築した「占領軍家族住宅地区」があちこちに出現した。これまで顧みられることの少なかったその知られざる歴史に、現地調査・聞き取り・史料調査等のアプローチで迫り、実態解明を試みる。

中川理編

近代日本の空間編成史

A5判上製・五四八頁／定価 八、五八〇円



わが国戦前の空間はどのように編成されてきたのか――。インフラストラクチャーと制度や政治、あるいは共同体などのかかわりを考究。建築史、都市計画史、土木史、造園史、歴史学など歴史的研究に携わる一線の研究者が、広くわが国の空間変容の実相を描き出す。

表示価格は税込

松原史著

刺繡ぬいの近代

輸出刺繡の日欧交流史―

4月刊行

A5判上製・三九四頁＋カラー口絵八頁／定価八二五〇円



国内外の王宮をも飾る日本の近代刺繡が花開いたおよそ50年間にについて、現存する作品を網羅的に調査することで、刺繡産業の状況を具体的に描き出し、日欧間でどのような影響を与えあったのかを明らかにする。

武藤夕佳里著

並河靖之と明治の七宝業

3月刊行

A5判・四一〇頁＋カラー口絵一六頁／定価九、九〇〇円



京都の七宝家・並河靖之と並河七宝を中心に、同家に残された膨大な史資料の検討、製作環境としての庭園の存在意義、釉薬の科学分析などに基づき、同時代の尾張七宝や東京の清川惣助七宝をも視野に入れ、七宝の表現を支えた源泉を探り、その上で近代七宝業のありようを明らかにする初めての試みである。

牧田久美著

キモノ図案から
プリントデザインへ

―GHQの繊維産業復興政策―

2月刊行

A5判上製・三六八頁／定価八、四七〇円



物資も国家的信用もなくした敗戦の状況のなかで、いかにして繊維産業は驚異的な発展の中で、日本の戦後経済復興の基幹産業と成り得たのだろうか。占領初期の1945年～47年の繊維業界の特殊な産業形態のあらましを確認したのち、1948年以降は世界情勢の大きな変化の中で、GHQの繊維産業優遇政策が果たした役割と著しい復興の経緯を検証する。

大濱徹也・熊倉功夫・筒井紘一校訂

萬象録 第九卷

高橋箒庵日記・還暦後記

5月刊行

A5判上製函入・七一四頁／定価 一四、三〇〇円

関剣平著

中国古代茶文化史

3月刊行

A5判上製・三六八頁／定価 九、九〇〇円

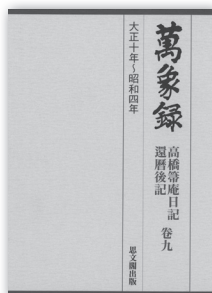
尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎編著

庭と建築の煎茶文化

近代数寄空間をよみてく

好評増刷

A5判上製・三五一頁／定価 六、〇五〇円



高橋箒庵（義雄）の日記『萬象録』全40冊を全9巻にわけて収録。
最終巻である第9巻には、解題に加え、今回初めて公刊される『萬象録』の続編『還暦後記』（大正10年～昭和4年の日記）を収録。

非アルコール飲料の代表的なひとつとして、いまや世界的文化を形成している茶。その源である中国茶文化はいかにして発展したのか。

中国茶文化成立期に当たる魏晉南北朝時代を基盤にして、さらに遡りその淵源に迫る。

煎茶の流行、茶の湯（抹茶）の復興——。近代茶道界はまさに煎茶・抹茶がせめぎ合い、そして融合する時代であった。これまで茶の湯の視座からのみ語られてきた近代数寄空間を煎茶の要素からよみると、新たな解釈を提示する。

表示価格は税込

鹿毛敏夫編

硫黄と銀の室町・戦国

3月刊行

A5判上製・四〇〇頁／定価 九、三五〇円

中島楽章著

大航海時代の海域アジアと琉球

—レキオスを求めて—

第41回沖縄タイムス出版文化賞

好評増刷

A5判上製・六三〇頁／定価 一〇、四五〇円

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

大航海時代の日本と金属交易

日本の銅生産や金属流通の有様、南蛮貿易に新たな視角を示す。

定価 三、八五〇円

別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編

キリシタン大名の考古学

新しい戦国城下論・キリシタン考古学論・流通論を提示。

定価 四、一八〇円



文献史学と考古学の研究成果を融合させ、鉱業社会の長期的変遷を追究する。さらに鉱物資源の偏在に起因する人間の競合・奪取・独占の営みを念頭に、硫黄を征したサルファー大名（大友・島津）から銀を征したシルバー大名（毛利・豊臣・徳川）への覇権の移行を浮き彫りにする。



これまで十分に活用されてこなかったヨーロッパの文献、地図などを縦横に用いることで、海域アジアの全体状況、ヨーロッパにおける地理認識の変化、さらに漢籍等の公式的な史資料からではとらえきれない古琉球期の琉球王国の活動を多角的に解明する。

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編 琉球船と首里・那覇を描いた 絵画史料研究

大型図版で近世琉球の姿が色鮮やかによみがえる。定価 二〇、三五〇円

菊池誠一編

朱印船貿易絵図の研究

精彩なカラー図版にくわえ、多彩な研究者による六篇の論考を収録。

定価 八、五八〇円

表示価格は税込

2021年冬〜2022年春 主な刊行予定

京都大学史料叢書 田中不二麿関係文書

京都大学文学部日本史研究室編

天文学序説 分野横断的にみる歴史と科学(仮)

真具寿明・松浦清編

住友史料叢書36 年々記三

住友史料館編

神像の研究(仮)

伊東史朗著

近世歌舞伎と演劇書(仮)

廣瀬千紗子著

現代美術史における前衛書のリポジショニング

宮津大輔著

メキシコ漫画イストリエタ(仮)

アルバロ・エルナンデス編

アカデミズム史学の危機と復権

廣木尚著

出土文字資料と宗教文化〔佛教大学研究叢書〕

門田誠一著

ジャポニスムとはなにか(仮)

ジャポニスム学会編

釈迦信仰と美術

稲本泰生編

法隆寺史 中(近世)

法隆寺編

園城寺の仏像 第五卷 南北朝〜江戸彫刻篇

園城寺の仏像編纂委員会編

禁裏・公家文庫研究 第8輯

田島公編

禁裏・公家文庫研究 第9輯

尾上陽介編

快慶

奈良国立博物館編

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁



戦い 闘

前田青邨

近代日本画壇を代表する名匠のひとり前田青邨は、伝統的な大和絵の技法と独自の画法を融合させ、近代日本画に新しい風を吹かせた。特に古典に関心のあつた青邨は、絵巻物の模写を熱心に行い、それをもとに武者絵などを多く描き遺している。彼の手によって歴史物語は血肉を得、迫力のある絵へと姿を変えた。

本作「戦い 闘」もそのひとつであり、青邨特有の巧みな筆致が見て取れる。「天上に神戦い地上に人間争ふ」という箱書きから、この作品は平家物語の「御興振」の一場面を描いたものと推測される。青邨が描いた「御興振」といえば、信貴山縁起絵巻や伴大納言絵巻の描写を取り入れ、青邨が一躍有名になるきっかけとなった「御興振」(一九二二年、第六回文展出品作)が知られるが、本作でも、これらの古絵巻を参考にしたであろう部分が見られる。

怪しげな雲が立ち込める中に見え隠れする武将達の緊迫した表情が画面に迫力を与えている。空には転がる宝輪が描かれ、正に戦いの真つ最中の激闘ぶりがうかがえる。そうした独自の生き生きとした画面構成をしつつも、細やかな線の運びや甲冑の古典的な色遣いを再現した本作は、青邨の表現技法や古典研究への熱心な姿勢がうかがえる作品のひとつであろう。



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和路東入元町355

TEL (075) 531-0001 FAX (075) 531-5533<https://www.shibunkaku.co.jp/>info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

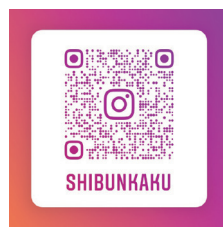


徳川家康像 一幅

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております
(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い
合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>kosho@shibunkaku.co.jp 思文閣公式 Instagram

個展・企画情報等、随時更新中
@shibunkaku

SHIBUNKAKU

思文閣



ぎやらい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ぎやらい思文閣

京都市東山区古門前通大和路東入元町386

TEL (075) 761-0001 gallery@shibunkaku.co.jpwww.shibunkaku.co.jp/gallery/